

歴史意識の詩学

－「セウォル号の惨事」に寄せて－

1. 民衆史の企て

4月16日、韓国珍島沖で乗客・乗務員476人を乗せた大型旅客船「セウォル号」が沈没した事故は、300人を超える死者・行方不明者の多くが修学旅行の高校生だったという痛ましきから、日本でも連日報道が過熱した。また安全より利益を優先させた船舶会社の体質だけでなく、「官民癒着と機関利己主義」（中央日報、7月9日付）による事故直後の対応の遅れと無責任体質なども指摘され、それゆえ社会の歪みもたらした犠牲、つまり「セウォル号の惨事」として受け止められ、朴槿恵政権の支持率下落の引き金にもなった。

事故直後、ネット上で「悲しい。本当に悲しい。80年5・18の時は怒りが大きかったが、今回は悲しみが怒りより大きい」という風変わりな書き出しのコラムを見つけた。書き手は聖公会大学の金東椿教授で、「大韓民国号はすでに沈没中だ」という刺激的なタイトルが付されている（ハンギョレ、4月22日付）。大韓民国号

2. 「李－朴」史観のたくらみ？

そもそも、セウォル号から唐突に「80年5・18」のイメージが喚起されるのはなぜか。犠牲になった高校生の親たちは、多くが安山市近郊の新興工業団地で働く労働者だったという。そして船が没した海域は全羅南道の珍島沖だった。光州を中心とした全羅道一帯は古くからの被差別地域であり、わけても世襲シャーマン

という船では、歴代権力者は忠誠心が演出される船上舞台の主役で、自分だけはいつでも個人用救命ボートで脱出する準備ができていた。彼らは二等三等船室の国民には目もくれず、船底の裂け目から海水が入ってくると大声で急を告げる者には「従北派」のレッテルを貼り、警察と検察を使って脅しをかける。李承晩時代からある船底の亀裂は、朴正熙の時代にさらに深刻なものとなった。稀に金大中と盧武鉉の政権が作った亀裂もあるが、最大の亀裂は李明博と朴槿恵の政権が押し広げたものだという。

以上を総括して、金東椿は「社会が破壊されれば小さな事故も大惨事になり、大惨事の犠牲者は主に船底の人々だ」と述べる。セウォル号を大韓民国号という国家構造に見立てながら、「船底の人々」の惨事を韓国現代史に埋め込もうとする書き手の意図は、冒頭に「80年5・18」（光州抗争）を持ち出したことで明らかのように、民衆史の企てにはかならない。

が伝えてきた死霊祭「シッキム・クツ」で有名な珍島は、流刑地として蔑まれてきた歴史をもつ。セウォル号が珍島の沖合に沈んだ偶然は、犠牲者の多くが生への怨望をのんで死んだ幼い高校生だったこと、またその多くが労働者の子女だったことを受けて、この事件を民衆史に編み込もうとする歴史意識にとって必然となる。

金東椿は、大韓民国号の船底の亀裂を「李承晩－朴正熙」と「金大中－盧武鉉」と「李明博－朴槿恵」の3つの単位で論じる。全斗煥・盧泰愚・金泳三の3つの時代（1981～97年）がそっくり欠落しているのは、単に「李承晩－朴正熙」時代の残滓と見なされたか、あるいは意図的に捨象されたかだろう。それというのも、彼が描く大韓民国号の歴史では、「金－盧」を例外の時代として、その前の時代も後の時代もまるで韻を踏むように「李－朴」の政権が船底の人々を蹂躪したとされるからだ。考えてみれば、これは斬新な歴史意識だ。李明博以後の「民主化が20～30年は退歩した」とも言われる現状を解釈するには、（軍事）独裁政権に対抗する民族民主主義運動という従来の民衆史

3. 民衆詩の企て

セウォル号の惨事からほどなくして、一篇の短詩がネットに流され、またたく間に拡散された（作者不詳、原文韓国語）。

1948年の済州、事件と言ったが、虐殺だった。

1980年の光州、事態と言ったが、虐殺だった。

2009年の龍山、惨事と言ったが、虐殺だった。

2014年の珍島、事故と言ったが、虐殺だった。

五千万国民は、記憶しなくては、繰り返されるばかりだ。

ここにも「李－朴」史観が読み取れる。

観を修正する必要がある。李明博も朴槿恵も、「金－盧」の時代を経験した国民が、民主的手続きを踏んで選んだ文民政権だからである。両政権の正統性を民主主義というこれまでの準拠枠から問えない以上、新たな歴史意識の定立が喫緊とされるのは必定だろう。

仮にこれを「李－朴」史観とでも名付けておこう。船上と船底に二分された社会では、常に「大惨事の犠牲者は主に船底の人々」で、船上舞台を愉しんだ権力者たちは自分専用の救命ボートで逃亡し、結局誰も責任をとらないのである。「そうであるから」と、金東椿は、次なる予言的な一文でコラムを結ぶ。

「そうであるからこの船の本格的な沈没は今からだ。」

「1948年の済州」は李承晩政権により島民の三分の一が虐殺された4・3事件を、「1980年の光州」は朴正熙～全斗煥の過渡的時期に起きた5・18民主化抗争を、「2009年の龍山」とは李明博の都市再開発に抵抗する住民が警官隊と衝突し、6人が犠牲になった事件をいう。朴槿恵政権下での「2014年の珍島」はセウォル号の惨事であり、珍島という場所性を強調することで、民衆史に組み入れようとする企てが明らかに見て取れる。

奇異に思えるのは1980～2009年の約30年間で丸ごと脱落していることだ。金泳三時代には聖水大橋や三豊百貨店の崩落事故、金大中時代には二人の女子中学生が米軍装甲車に轢き殺される事件があり、また盧武鉉時代には大邱地下鉄放火事件というセウォル号惨事と比肩すべき

大惨事が起きている。民衆史の観点からしても、これらの事件が看過されてよいとは言えない。あえて語らない意図は何なのか。

そこには金東椿のコラムと相似した民衆詩の構造が見出される。民衆史的な歴史叙述の中で

4. 歴史意識の詩学

二つの語りに通底する歴史意識は、70～80年代以降の民衆史観に照らせば目新しいが、さらに歴史を遡れば、既視感を呼び起こすいくつかのフックに探り当たる。

たとえば、全羅南道島嶼部に伝わる13世紀の將軍伝説の変容を分析した羅京洙は、順次構造と並列構造からなる伝説の構造に「民衆天」と「支配天」の二律背反、つまり黙示録的歴史認識と英雄待望を見出しながら、伝説で国史を補うことで歴史の全貌を明らかにすることが、語り手たちの使命感であったと指摘する（『光州・全南道 民俗研究』、1998年）。全羅道に言い伝わる「南海真人説」は、開闢の世は南から開かれるとして英雄（＝真人）の出現を待望する民間信仰だが、そこには羅京洙が明らかにした伝説の構造が反映されている。

「李－朴」時代の歪みが前景化されるあまり、非「李－朴」の時代の記憶すべき大惨事が捨象される。加えて、この詩も、国民が記憶しなくては「李－朴」の暴虐は繰り返されるばかりだと、予言的な警句で結ばれる。

また、李朝中期に成立した「鄭鑑録」はそんな黙示録的世界観を最も端的に示した書物で、李氏500年の後に鄭氏の800年が訪れるとし、易姓革命による李朝滅亡が予言された。王朝は禁書としたが、民間に広く流布した。

本稿で引用した語りが、ともに「李－朴」の姓に特化された歴史叙述である点に、さしあたり留意しておく。前の「李－朴」時代は、全羅南道出身の金大中という「南海真人」の出現で、克服されたかに思われた。だが今、再び「李－朴」の時代が訪れ、詩人は災厄が繰り返されると、金東椿は国が亡びると、語りの最後に警告する。これを黙示録的な予言と読み取れば、セウォル号の惨事に寄せた新たな歴史意識の予兆となる。その詩学が全うされるかは、語り手たちの使命感にかかっている。



真鍋 祐子 (まなべ ゆうこ)

[生年月日] 1963年10月1日

[出身大学又は最終学歴] 筑波大学大学院、博士(社会学)

[専門領域] 朝鮮研究

[主たる著書・論文]

『増補 光州事件で読む現代韓国』平凡社、2010

(共著)『昔ばなしで親しむ環境倫理』くろしお出版、2009

『中心と周縁からみた韓国社会の諸相』慶應義塾大学出版会、2007、(論文)『アイデンティティ・ポリティクス

としてのツーリズム—中国東北部における韓国のパッケージ・ツアーの事例から』『文化人類学』74-1、2009 他

[所属] 東京大学大学院情報学環／東洋文化研究所・教授

[所属学会] 日本文化人類学会、日本社会学会、「宗教と社会」学会、韓国朝鮮文化研究会、現代韓国朝鮮学会